JSQCニューズ NO. 1

1971年 8月

発行　日本品質管理学会　東京都渋谷区千駄ヶ谷 5の10の11　日本科学技術連盟内　電話　東京(352)2231

◇◇◇◇◇◇◇ 第1回総会開かる ◇◇◇◇◇◇◇

晴天に恵まれた昭和46年 4 月24日，わが日本品質管理学会の第 1 回総会が，東京税理士会館大講堂で開催された．窓越しに見る新宿御苑の木々の緑が目にしみるようだ．

定刻 2 時，司会が開会を宣した．正会員632名中，本日出席者は102名（別に委任状提出者281名）とのことであるが，定刻後も会員は続々来場され，用意された椅子はほぼ満席となる盛況であった．

まず山口襄氏が仮議長となり，水野実行委員長より，本会創立の経過が報告され，次に会員の投票により選出された役員・評議員の紹介があり，いずれも異議なく承認された．

そこで原会長が議長となり，会長として就任の挨拶をされた．80才台とはとても信じられないような若々しい声で，学会設立の意義とその重要性を説き，最後に会員一人一人がみな私同様会長の気持で学会を運営していただきたいと結ばれ，満場の拍手を浴びた．

次に一般議事にはいり，石川副会長より，手ぎわよく，会則の大綱，事業計画案，収支予算案の説明があり，いずれも満場一致原案どおり承認された．

ついで，日本工業経営学会木暮会長，日本科学技術連盟西原事務局長，日本規格協会東理事よりそれぞれ祝辞があり，引き続き世界各国より寄せられた祝電十数通のうち，その一部が披露された．その中にはＡＳＱＣ，ＥＯＱＣはもちろんとして，ソ連より送られてきたメッセージもあり，一同は世界ＱＣ界におけるわが国の地位の高さをつくづく感じた次第であった．また，おなじみのデミング，ジュラン両博士からも本会の発展に期待する旨の言葉が寄せられた．最後に，山口襄氏の「品質管理の25年をかえりみて」，水野滋氏の「品質管理の現状と将来」と題する 2 つの記念講演があり，いずれも滋味あふるる，かつ示唆に富む内容で，参会者一同満足して帰途についた．時に午後 4 時半．（戸谷記）

担 当 役 員

○は主務，＿＿は担当副会長

行事	○今泉，朝香，鉄，水野
会計	○西原，杉本，山口
庶務(規程)	○村松，戸谷，近藤(良)，石川
編集	○木暮，東，朝尾，水野
渉外	○西原，草場，石川
会員	○大場，渡辺，石川
研究開発	○朝香，久米，水野

〈委 員 会〉

編集委員会　木暮，企画委員会　今泉
研究開発委員会　朝香，規程委員会　村松

昭和46年度年次大会予告

1. **会場**：東京都文京区
　　東京大学　工学部
2. **期日**：昭和46年11月20日（土）
　　9：30～18：00
3. **プログラム**：
　9：30～10：30　特別講演「信頼性保証」
　10：30～12：30　パネル討論会
　　「日本品質管理学会に何を期待するか」
　13：30～16：30　研究発表
　　1件当たり発表35分，質疑応答10分の計45分
　17：00～18：00　懇親会
4. **会費**：
　参加費　会員　1,000円（締切後1,500円）
　　会員外　2,000円（締切後2,500円）
　懇親会費　1,000円
5. **研究発表参加申込みについて**
　1）資格　発表者は会員に限る
　2）申込み方法
　　○研究発表申込締切　9月20日
　　（所定の申込書を使用のこと）
　　○講演予稿締切　10月 9 日
　　（学会規定の原稿用紙にて400字程度にまとめる）
　　○参加申込締切　10月20日
　3）申込み先
　　東京都渋谷区千駄ヶ谷 5の10の11
　　（財）日本科学技術連盟内
　　日本品質管理学会　事務局
　　〒151　電話03－352－2231(代)

各委員会の活動

編集委員会

委員長　木暮正夫

当委員会は，すでに雑誌『品質管理』Vol.22，No.7誌上でご案内申し上げております日本品質管理学会機関誌『品質』編集などの目的で編成され，構成員は学界・実業界から次のようなかたがたに集っていただきました．

木暮正夫（東工大），今泉益正（日本鋼管），狩野紀昭（電通大学），久米均（成蹊大），鉄健司（東海区水産研），小林龍一（立教大），広津千尋（東工大），真壁肇（東工大），米山高範（小西六）．

第 1 回編集委員会は 6 月21日（月）に開かれ，学会誌の名称や編集方針の検討を行ない，第 2 回は 7 月21日（水）に開催，具体的な内容や今後のすすめ方を検討いたしました．

学会誌などにより会員相互の連絡と研究報告の場をつくることによって，品質管理における学術交流を盛んにすることがわれわれの念願でありますが，目下，9 月発刊を目標に創刊号を出したいと鋭意努力いたしておりますので，会員の皆さまのご支援をよろしくお願いします．

企画委員会

当委員会は，学会の行事企画，新委員会・新部会の企画などを担当するいわばPlanning Committeeです．

第 1 回を 6 月23日（水）1，東工大水野教授，東海区水産研・鉄氏などの委員で開催し，学会行事，昭和46～47年度各種行事スケジュールなどを検討しました．

そして，当面の行事として11月20日(土)に開催する「日本品質管理学会昭和46年度年次大会」のための実行委員会を発足させました．実行委員会は目下そのためにいろいろな計画を立案し，理事会の承認を得て本ニューズでご案内のような年次大会を推進中ですから知人・友人をお誘いあわせのうえ奮ってご参加願います．

このほか強調行事，表彰，国内外チーム交流，定例集会，研修会，展示会などが考えられますが，遂次検討しながら会員の皆さんのご賛助を得て企画していきたいと思います．よろしくお願いいたします．

研究開発委員会

委員長　朝香鉄一

日本品質管理学会研究開発委員会準備会を46年 5 月10日開催した．出席者氏名は，水野滋，久米均，朝香鉄一の3名で，どのような委員会を作ったらよいか，研究会を結成する委員会のメンバーを次の諸氏に委嘱する，との案を作成し，理事会で承認を得て決定に運びたい旨，了承されました．研究会を結成する委員会のメンバー（17名）は下記のとおり．

久米均，狩野紀昭，広津千尋，真壁肇，大場呉一，土橋俊人，米山高範，鉄健司，赤尾洋二，古林隆，柴田義貞，大森志郎，押村征二郎，岸暁男，高橋弘之，高城茂，藤森利美．

なお，発表論文については委員会で募集要綱を決めたうえ，できれば11月に発表会を開くことを理事会で確認してもらい，実行に移していきます．

規程委員会

委員長　村松林太郎

第 1 回総会で，学会の会則が決定されましたが，さらに会の運営をシステマテックに行なうために，基本的ないくつかの細則や規程を制定する必要があり，そのために規程小委員会が設けられました．幸いに戸谷理事が，その道のベテランでおられるので，各方面からの要望に従って逐次制定しております．その基本的考え方は，システマテックな活動を行なうとともに急速な発展的活動が行なえるように「法三章」という思想でやる予定で，とりあえず制定を要する規程として，3 回にわたって検討を重ねております．

委員会，会議，経理，会員，編輯などに関するものがあげられております．

会員各位および各部からのご希望をいただきたいと思います．小委員は最小のメンバーでスタートし必要に応じて参加していただく予定で，次の 4 名のかたがたにお願いしております．

戸谷富士夫，高橋弘之，小浦孝三，林松林太郎．

JSQCニューズの 発刊にあたって

副会長　石川　馨

日本品質管理学会が発足し，いよいよ活動を開始したことを，皆さまとともに喜びたいと思います．日本の品質管理もスタートして以来20年以上になりますので，この学会の設立は少し遅すぎた感がありますが，これから会員全員のご協力によって，アカデミックな学会として発展させていかなければと思っています．

学会として重要なことは，研究の発表，討論，会誌の発行とともに，互いに情報交換が必要なことは申すまでもありますまい．今後この“ＪＳＱＣニューズ”により，世界および日本のＱＣの動き，学会の動き，行事の連絡，会員の動きなどをお知らせするとともに，会員相互の連絡の場など情報交換の広場にしたいと思っています．

皆さまのご協力により，このニューズを意義あるものに育ててゆきたいと思いますので，よろしくお願いします．

〈EOQCだより〉

モスコにおける EOQC第15回大会に参加して

副会長　石川　馨

1971年6月22日から25日までモスコで開催されたEOQC（ヨーロッパ品質管理連合）の第15回大会に参加してきましたので，それについて簡単にご報告します．私は日本の品質管理について話をしてほしいという大会事務局（ソ連）からの要請によって行ったわけです．日本からの参加者は東京理科大の鈴木武教授と私の2人だけでした．

EOQCのことをちょっとご紹介しておきますと，ヨーロッパ諸国のQC関係の団体が国を代表して参加している連合体です．現在のメンバー国は下記の19ヵ国です．

ブルガリア，チエッコスロバキヤ，デンマーク，西独，東独，フィンランド，フランス，英国，イタリー，ユーゴスラビア，オランダ，ノールウェー，ポーランド，ポルトガル，ルーマニア，スペイン，スエーデン，スイス，ソ連．

今回の大会のテーマは，はじめは，

Quality-Standard-Qualimetry でしたが，あとでもう1つ追加されていました．

Towards Higher Quality Through Standards ところが，あちこちにかかっているプラカードには，

Higher Quality Through Standardization となっており，どれがねらいかはっきりしませんでしたが，講演内容をみると Qualimetryの話はほとんどなく，標準化が盛んに強調されていました．これも今回の会長がソ連の国家標準化委員会長（大臣）の Boistov さんでしたらやむをえなかったのでしょう．しかし，チエッコやポーランドの人たちも標準化では品質はよくならないといっていました．1969年に日本で行なった品質管理国際会議のときに，私も Boistov さんと消費者を目標にQCをやるか（石川），国家規格を目標にQCをやるか（Boistov）と議論をしたのですが，私は国家規格だけを目標にしていたのではなかなか品質はよくならないと思います．1967年に発足した五角形マーク方式は，ソ連に適した品質向上の方法と思って期待して行ったのですが，今回の大会では影をひそめていました．

私は1962年，1967年と今回でモスコに3回目ですが，はじめの5年間にはソ連の品質が非常によくなったと思いましたが，今度の4年間にはそれほどよくなっていないように思いました．最近出来たビルのエレベータの品質などひどいものでした．第24回共産党大会の議事録なども読みましたが，ソ連にもいろいろの悩みがあるようです．

参加国は名簿では前記19ヵ国のほかに，オーストリア，蒙古，アメリカ，ハンガリーおよび日本の合計24ヵ国で，530名くらいですが，実際は名簿とだいぶ違っているようで，本当の数字は不明です．しかし，開会式のときは，ソ連から多くの参加者があり，1500名くらいは出席していたようです．

鈴木氏も私も正式の発表以外にシンポジウムと称してソ連人を集めた他の会場を引っ張り回わされ話をさせられたのでゆっくり他の人の話を聞くことができなかったのは残念でした．

大会のスケジュールは変更が多く，うっかりするとどこで何があるかわからないような状態で，運営はうまくなかったようです．しかし会場でも，また新聞記者からもいろいろ質問がでて，日本のQCについては相当関心をもっていました．

ソ連のQCが，製品の品質が，今後ソ連の体制とともにどのように変わっていくか興味のあるところです．

会員連絡

学会誌「品質」については，報文募集は既にご案内いたしておりますが，さっそく報文ご応募をありがとうございました．今後も奮ってご応募をお願いいたします．

「創刊号」は目下編集委員会で鋭意すすめており，9月に発刊の予定です．内容は，会長就任挨拶，学会設立までの経過，学会発足に当たり国内外から寄せられた祝電や祝辞，特別講演内容（2件）など総会関係記事を中心にしてまとめられる予定です．

〈ASQCだより〉

ASQC年次大会に出席して

日本鋼管　今泉益正

1971年5月19日から21日の間,ChicagoのConrad Hilton HotelでASQC（American Society for Quality Control）の25周年記念（Silver Anniversary）Annual Technical Conference が開催された．

私はたまたま日本鉄鋼連盟の自主管理活動訪米チームの団長として，鉄鋼各社の現場監督者（QCサークル，ZDグループ，ノーエラー運動などのリーダーのかたがた）21名とともにこの大会に出席した．

今年はASQCの第1回年次大会が開かれてから25周年に当たるので，大会テーマは，

"Great Heas from the Post
New Heas for the Future"

であり，25年間の歴史の回顧と将来の展望についての講演がいくつか行なわれた．25年間の経緯については，*Quality Progress* 誌71年5・6月号にくわしく述べられている．

大会のKeynote addressは Dr. A. V. Feigenbaum が，'Quality strategy for a full employment economy' と題して行ない，現在のアメリカの不況打開策として完全雇用の目的に寄与するQCのstrategyを打ち出す必要があること，また過去25年の積み重ねの上にたって飛躍するためのQ-strategy が必要であることを述べた．

大会の講演の傾向を見るために一表にまとめてあるが，ここでは紙面の関係で割愛する．特に目だつ点としては，歴史的回顧と展望，環境保全，消費者問題，motivationや人間問題などが多くとりあげられていることである．

私は日本鉄鋼連盟の代表として「日本鉄鋼業界におけるJK-Activity（自主管理活動）」の発表を行なったが，数次にわたるQCサークル訪米チームの派遣の影響もあり，また Dr. Juran や日本のかたがたによる多くの論文も読まれているためか，かなり勉強したうえでの質問が多く出された．

なお，日本からは日本化薬の小浦孝三氏,住友電工の鈴木貞夫氏が発表された．小浦氏の報文は 'Practical example of company-wide QC in administrative process' と題して管理部門，事務部門のQCを重点に日本の全社的QCの事例を紹介したものであり，鈴木氏の報文は 'Ability development of young company' staff' と題して，入社1年のスタッフに対して，科学的方法をシミュレーション・モデルを用いて行なう訓練プログラムと，2～3年の経験者に対して，システム・アナリシスを訓練するプログラムの内容を紹介したものである．

〈東南アジアだより〉

シンガポールのQC活動

玉川大学教授　三浦　新

シンガポールは従来商業中心で繁栄を続けてきたが，1965年マレーシアから分離独立して以来，急速に工業化を進めてきた．

赤道直下に位置し広さ僅か580 km²，人口200万の小国ながら，教育はよく普及し生活水準も高いこの国にとって，工業化はアジアの他の国に比べて適している．工業化に伴い，固有技術の導入とならんでQC，IE，ORなど管理技術の導入にも非常に力を入れている．この国で工業推進の中心をなしているのは Economic Development Board(経済発展局)である．この下部機構として National Productivity Centre（NPC）と Singapore Institute of Standardization and Industrial Research（SISIR）があって，両者が協力してQCの導入普及を行なっている．

SISIRは日本の工業技術院標準部と工業試験所をいっしょにしたような役所で，工業用品の試験研究と標準を作るという仕事をいっしょに行なっている．

昨年（1970年）6月にはSISIRとNPCの共催でQCセミナーが行なわれAPOの依頼で私が日本から講師として派遣された．その後私は3週間にわたって工場でQC指導を行なってきた．各工場ではInspectionはよくやっているが変動の原因の探究，変動原因の除去，工程の改善など本来のQC活動はまだ不十分である．私は特にこのような点を強調して指導してきた．

今年はAPOの計画として，オランダからQCのコンサルタントのJ.A.Atzema氏を招きシンガポールで，8月5日から13日までQCセミナーを行なっている．これに引きつづいて私が8月14日から9月4日までAPOから派遣され，工場の工程の解析と改善について実施指導を行なうことになっている．

工業はかなり発達しており，すでに多数の日本の工業が進出し，ここでは独自のQCを行なっている．また，IDBには台湾から生産力及貿易中心(CPTC)におられた施政階氏が数年前からきていてQCの指導を行なっており，近いうちに必ずや実を結ぶものと信じ楽しみにしている．

〈編集後記〉

日本経済もようやく転機を迎えようとしています．すなわち，外国からの輸入制限，自由化や円切上げへの圧力は日増しに強く，一方，国内では公害問題や消費者運動に直面し，品質問題とてもこれらと無関係ではあり得なくなりました．当学会もこれらの状況を直視して，より深く，より広い研究を，会員の協力の下に進めてゆきたいと念願しております．そのためには，会員相互の迅速なコミュニケーションの場を持つことが必要であります．現在学会の機関誌の刊行が編集委員会の手で進められておりますが，そのほか，内外のQC界の情報と当学会の諸計画・行事などをできるだけ速く，会員に伝達するため「JSQCニューズ」の発行を企画しました．本紙を会員相互の意思伝達の場としてご活用いただきたく，ご意見やご投稿をできるだけ多くお寄せくださるようお願いいたします．

（村松，戸谷）